

研究報告  
(研究プロジェクト)

## メダリストへの軌跡 —松田治廣 選手—

清 宮 孝 文 (スポーツ社会学研究室)  
依 田 充 代 (スポーツ社会学研究室)

本稿は、「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した、メダリストへのインタビューをもとに構成されている。

本インタビューは平成29年11月24日(金)に松田治廣氏にお話を伺った。

### 【経歴】

1957年4月 日本体育大学体育学部体育学科入学  
1961年3月 日本体育大学体育学部体育学科卒業  
1961年4月 日本体育大学助手  
1967年4月 日本体育大学講師  
1973年4月 日本体育大学助教授  
1979年4月 日本体育大学教授  
2004年4月 日本体育大学名誉教授

### 【競技歴】

1962年 世界選手権プラハ大会 団体優勝, 個人総合7位, 跳馬2位  
1964年 オリンピック東京大会 団体優勝, 個人総合6位, 跳馬優勝, 鞍馬4位  
1966年 世界選手権ドルトムント大会 団体優勝, 跳馬優勝  
1969年 プレオリンピックメキシコ大会 団体優勝, 跳馬優勝

### 1. 競技との出会い

松田氏が体操と初めて出会ったのは、高校1年生の時だった。千歳丘高等学校の体操競技部の先生(後にその先生がオリンピック候補選手だったと知る)が「ちょっとでも、自分の運動神経が良いと思う人は、体操競技部に入ってください」と言っているのを聞いて、入部を決意した。その時、松田氏は「体操の『た』の字も知らなかった」という。当時の千歳丘高等学校には、体操競技の設備が整っていない、鉄棒、マット、鞍馬が外に設置されている状態であったが、入部してからは、体操競技の魅力に惹かれ、毎日練習を続け、勉強

よりも体操競技を優先させていた。そんな中、親や兄は医者になるために東京で勉強をさせていたため、「勉強しないなら宇和島に帰りなさい」と松田氏を1年生の1学期が終わった後に宇和島東高等学校に転校させた。しかし、転校した宇和島東高等学校の方が体操競技の施設が充実しており、6種目が全て体育館に設置されていた。それから、体操競技の魅力に益々惹かれるようになり、始めてから3年目の高校3年生の時にはインターハイ個人総合6位に入賞し、才能が開花した。

## 2. 日体大の思い出（選手生活の思い出）

高校3年生の時にインターハイ6位入賞した後、同じ宇和島東高等学校出身で日本体育大学の教員であった河野氏から「日体大に來い」と誘われ、日本体育大学への入学を決意した。入学後の新人戦で優勝し、「河野先生が喜んで、自分が履いた試合のズボンを僕にくれたわけです。それが僕にぴったり合っ、もう、うれしくて、うれしくて」と当時の思い出を笑顔で語ってくれた。しかし、その後は自分が思うように体操競技ができなくなってしまった。そんな時、松田氏に転機が訪れた。それは、河野氏のメルボルン大会銀メダル獲得の報告会である。この報告会が宇和島で行われ、松田氏も参加した。そこで竹本氏らの体操競技を目の当たりにし、「どうにかしないといかんぞ」という思いが強まった。それから東京に帰った松田氏は、毎朝5時に起きて、自分の弱点であった「つり輪」を一生懸命練習した。その成果が実り、つり輪が上手くなっていくと、全種目が前よりも上達し、大学3年生、4年生と個人総合2位に輝いた。その当時の気持ちを松田氏は「個人総合2位になって、だんだんとオリンピックのことが言われ始めてきました。そして、『どうだろうな、俺はオリンピックに出れるかな』なんて思いながら、ずっとやっていたわけです。そしたら大学では僕にかなう人はいなかったんで、自分は『よし、これからはオリンピックに出るためには海外遠征をしなくてはいけない』と飛行機に乗って海外に行くことを夢見て一生懸命練習したんです」と大学時代のオリンピックに対する思いを語ってくれた。大学卒業後、松田氏は全日本選手権大会で個人総合6位に入賞し、夢だった海外遠征を実現することができた。その海外遠征での練習が非常に自分の能力向上に繋がったと話している。

松田氏の技である「山下跳び」、「新山下跳び」については、次のように語ってくれた。

「山下跳び」については、「いつものように、練習に行ったところ、後輩が『すごい跳び方してる

な』と思ってよく見てたんです。『これはいいぞ』と思ってね。僕も真似して跳んでみたら、うまく跳べたんです。「よし、これだ」と思って。それは走ってきてから踏み切り板がマットの間で50cmぐらいしか開いてなかったんで、ぴょんて飛び上がってひゅーと、前半の大きさが全然なかったわけです。ところが、僕は『よし、それじゃあもっと離そう』と思って、踏み切り板をぐーっと離れたわけです。2メートルまで離しました。こっから、だーっと走って、体の前で、手前で手ついて、それから、うーんと腰伸ばして、これが山下跳び」と両手で表現しながら山下跳びの原点を解説してくれた。また、当時の山下跳びに対する周囲の反応について、「今までは体操界ですと、山下跳びって認められなかったし、全然なかったわけなんですけども、僕が跳ぶようになってから山下跳びって言われるようになったんです。山下跳びを外国遠征するたびに跳んでたら、ドイツのFIGの委員してた先生が『これは面白いぞ』って言って、いろんな角度から写真撮ってくれたんです。それで、『この跳び方はすごくいい』っていうことをFIGの委員会で発表して、これを『山下跳びという名前をつけよう』と決まったわけです。そして、山下跳びが10点満点の種目になっていったわけです。それからもう楽だったですね。もう山下跳びどんなに着地が動こうとも9.6以上必ず取れたんです」と当時を振り返ってくれた。

「新山下跳び」については、「今の山下跳びのままだと、僕よりも運動神経のいい選手に負けてしまうと思い、何か今の山下跳びで工夫しないかんということで考えたのが、1回ひねりを加えた『新山下跳び』なんだ」と語ってくれた。しかし、当時は、1回ひねりの技法が科学的にも解明されておらず、この技の習得には非常に苦勞し、何度も25メートル走ってきて、跳んで1回ひねる練習が「苦痛だった」という。その新技を練習している頃から東京オリンピックの強化合宿が始まり、竹本氏が新技会得に協力してくれた。そんな中、青森の八戸で強化合宿があった時、体操競技の男

子6種目、女子4種目の間にトランポリンが置いてあった。そのトランポリンを前に竹本氏が「おい、松田、まずはトランポリンで1回ひねりの練習しろ」って言って、この練習を始めた。その当時のことを松田氏は、「そしたら楽なんですよ、これが。25メートル走る必要ないしね。背中から落ち、ぼんってして、ぼんっと立つときに、くるっと1回ひねりすればいい。それをやってたら、あるとき、くるって1回ひねりできたんです。それを竹本先生が見逃してなかったんですね。『山下、手を上で回したぞ』って言うんです。それで自分で意識しながら回したら、くるっ、くるってひねれるようになったんです。『うわー、これはやったぞ』ということで、竹本先生のおかげなんですよね。それで、あとは走って、手を上で行くと回ったら、どうにかひねれたんです。『これはやったぞ』ってということで、大体、約1年ぐらい、それまでにかかりましたけど、それで山下跳びの1回ひねりができるようになった」と語ってくれた。

その他にも、「新しい種目を身に付けるのが大好き」という松田氏は、高校時代から常に新しい技の会得に挑戦し、「2回宙返り」や「大逆手車輪」なども自分で探求し、会得していった。

### 3. 東京オリンピックでのメダル獲得

常日頃から献身的に練習を重ねていた松田氏は、種目別の跳馬に関しては、「絶対に優勝できる」と話してくれた。松田氏の姪にも「おじちゃんが金メダル取れなかったらいかんから、木で作った金メダル持って行こう」と言ってくれ、優勝した後に会ったら「おじちゃん優勝したね、良かったね。この金メダル（木メダル）もういらないね」と言われた際に写真を撮ったことは今でも忘れずに覚えているという。一方で、体操競技男子団体での優勝は、他の選手のコンディションがあまり良くなく、さらに松田氏も含めて2人が1回目を失敗してしまい、「復行」という制度を使い、持

ち直したと当時の苦戦した様子を語ってくれた。結果的に体操競技男子団体では優勝の栄光を掴み、表彰台の上で思わず手を挙げて「皆さん、ありがとうございます」と言ったことが良い思い出だと話してくれた。

東京オリンピック中の舞台裏では、「種目別選手権のときに僕は選手村に自分の試合ズボンを忘れてたんです、これから試合があるっていうのに、でも本当に東京体育館と選手村が近かったもんですから、間に合ったんですけどね。長澤選手がそのとき取りに行ってくれて、持ってきてくれた。『ああ良かった、良かった』って言ってね。そのことが今だに頭から離れません。ズボン忘れてきて、やっと間に合ってズボンを履いて、試合に出たんですよ。そして、鞍馬が4種目目だったかね。ちょっと遅かったから、間に合ったんですけどね」と選手たちしか知らない貴重な舞台裏の話もしてくれた。

### 4. その後の人生

世界選手権ドルトムント大会、プレオリンピックメキシコ大会で優勝し、もう一度メキシコ大会を目指そうと奮起していた松田氏だが、オリンピックの代表予選会で9位になってしまい、引退することを決意した。それから、指導者になるためにも、国際審判員の資格を取らないといけないと思った松田氏は、アメリカのインディアナポリス大学に体操指導を兼ね語学勉強に向かった。松田氏のコーチ就任以降、インディアナポリス大学の体操競技部の成績が伸び、そのコーチもアメリカ体操協会の専務理事に就任した。その後、日本からカナダに体操競技の模範演技会をするために選手が呼ばれた際、松田氏もそこに派遣された。そして、カナダの体操協会の会長が「君、英語の勉強したいんだろう。だったらアメリカよりカナダのほうがいいぞ、だからカナダに来いよ」とスカウトされ、カナダに拠点を移した。カナダでは、客員教授として大学で体操競技の授業を担当し、

カナダ体操協会の方々と一緒にカナダの体操競技を盛り上げていった。その後、アメリカでの経験が半年、カナダでの経験が半年、計1年間の海外経験を持った松田氏は日本に帰国し、英語で国際審判員試験を受け、見事合格した。

帰国した松田氏は、日本体操協会の男子のコーチに就任したが、体操女子の成績不振から女子のコーチへと移った。当時、海外では男子のコーチが女子を指導するという形態が通常になっていたが、日本では女子へは女子のコーチが指導するというのが普通であった。モンリオールオリンピック大会の予選会であったヴァルナの世界選手権大会では、松田氏と当時委員長を務めていた鶴見氏の懸命な努力が実り、7位に入賞し、モンリオールオリンピックへの切符を掴んだ。このことから、「男子が女子を指導するのはいいことなんだ」という通説が日本でも広まり、松田氏が体操女子の委員長、常務理事を歴任し、懸命に女子を強くするために10年間努力した。その後、塚原氏などの女子を指導する方々が出てきたことから、体操女子の指導から身を引き、最後は日本体操協会専務理事を務めた。

また、日本体育大学でも体育学科長、体育専攻科長、企画部次長、学長室次長、学長室長、寮監長、図書館長と重要な役職を担った。

## 5. 後輩に一言

体操競技部に対しては、「今、かなりいい感じで進んでいますよね。例えば畠田先生にしても瀬尾先生にしても、すごく働いてると思うんですよ、体操競技部の人間として両方が、男子の監督が畠田先生で、女子の監督が瀬尾先生で。瀬尾先生もこの間、村上っていうすごい選手を育成したね、もしかしたら個人総合で優勝するんじゃないかと思って、それから畠田先生も、内村くんとか白井くんとか、これを育ててますから順調だと思うんですよ。いろんな話を聞いてると、凄く良いこと言ってるんですよ。これは本当に誰から勉強した

んだらうなと思うぐらい。僕らはあまり会ってないですから、話したこともないですよ、内村くんとも白井くんとも話してない。でも言ってることってというのは素晴らしいこと言っています。だから、これだったら2020年、東京オリンピック大丈夫だなと僕は自信を持っています」と太鼓判を押した。また、「僕は、常に真剣勝負だった。だから僕らがプラハの世界選手権に行ったときも、部屋にいるときから規定の練習をしていました。部屋にいるときから、こうやって、ああやって、こうやってって、『もし負けたら俺たち日本に帰れないな』っていうことまで言っていました。みんなが『日本に帰れないぞ』って。だから『一生懸命頑張ろうな』って言って、本当にそれぐらい真剣にやりました。だから、あまり勝ち過ぎるんで、みんなが安心して過ぎてるんじゃないかなって思いました。ただ、皆さん、本当に立派だと思っています。だからこそ、真剣味を、もう少し持ってもらいたいなと思います」と自分の実体験からのアドバイスを語った。

日本体育大学の学生にも、「とにかくスポーツは真剣勝負なんだということをお分かってもらいたいです。『なんだか楽しんでいる』とか、そういうことじゃなくて、常に真剣にいかないと駄目なんです。というのは、僕は松浪理事長が来て、日体大が世界一の体育大学になれると思っているんです、本当にそう思っているんです。また、学長の具志堅先生も優勝した選手だったから、本当にそう思っています。具志堅先生はこうと決めたらテコでも動かないという強い精神力を持っているんですよ。みんなが素晴らしい大学、世界一の体育大学になるんだという気持ちで、常務理事と理事長についていかないといかんと思うんですよ」と松田氏の言葉から今の日本体育大学に対して、非常に期待していることが伺われた。

筆者がインタビューに伺った際、松田氏と奥様がとても温かく迎え入れてくれた。松田氏と奥様の出会いは日本体育大学の体操競技部であること

も話してくれた。また、その奥様も当時、オリンピック候補選手になるだけの実力があつたと拝聴した。この仲睦まじいご夫婦に心から感謝し、インタビューを終えたい。

